

Ⅲ 平成30年度研究開発の成果と課題

1 仮説の検証

(1) 仮説1について

<p>ア 仮説1</p> <p>教育課程に、グローバル・リーダー育成を目的とした教科を設定し、グローバルな視点からものごとを捉える学習内容にするとともに、日本の歴史・伝統・文化及びグローバルな課題に係る授業、調査活動、体験活動、交流活動、発表活動等を取り入れれば、日本の歴史・伝統・文化に対する理解が深まり、グローバルな社会課題に対する関心・意欲、探究心が高まり、思考力・判断力・表現力・情報活用能力等が向上し、コミュニケーション能力が身に付くのではないかと。</p>																													
<p>イ 身に付けさせたい能力等</p> <p>① 日本の歴史・伝統・文化を理解する力 ② 思考力・判断力・表現力・情報活用能力 ③ グローバルな社会課題に対する関心・意欲・探究心 ④ コミュニケーション能力</p>																													
<p>ウ 実施内容</p> <p>① 研究開発2 教育課程の編成 学校設定教科「グローバルラーニング（GL）」を設定し、「GL世界史」及び「GLアクティブ」の実施</p> <p>② 研究開発3 国内グローバル研修 「GLアクティブ」において英語宿泊研修の実施</p> <p>③ 研究開発5 大学との連携 「GLアクティブ」「GL探究」（総合的な学習の時間）において大学訪問や大学教授等の講演・講義・課題研究支援の実施</p> <p>④ 研究開発6 企業・国際機関等との連携 「GLアクティブ」「GL探究」（総合的な学習の時間）において企業や国際機関等との訪問、講演、課題研究支援の実施</p> <p>⑤ 課題研究以外の研究開発1 教育課程の編成 学校設定教科「グローバルラーニング（GL）」を設定し、「GLコミュニケーション英語」及び「GL英語研究」の実施</p>																													
<p>エ 検証方法</p> <p>① 生徒、保護者によるアンケート ② 課題研究及びプレゼンテーション等の成果からの分析</p>																													
<p>オ 関係するアンケート</p> <p>A 「日本の歴史・伝統・文化について語る事ができる。」</p> <p>【第3学年生徒アンケート】（上段平成29年2月 中段平成30年2月 下段平成31年11月実施）</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>とても思う</th> <th>思う</th> <th>どちらかと言えば思う</th> <th>どちらかと言えば思わない</th> <th>思わない</th> <th>全く思わない</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>2.3%</td> <td>18.5%</td> <td>44.5%</td> <td>21.9%</td> <td>11.0%</td> <td>2.3%</td> </tr> <tr> <td>7.2%</td> <td>23.4%</td> <td>43.8%</td> <td>16.2%</td> <td>6.4%</td> <td>3.0%</td> </tr> <tr> <td>15.6%</td> <td>23.3%</td> <td>37.4%</td> <td>13.2%</td> <td>7.4%</td> <td>3.1%</td> </tr> </tbody> </table>						とても思う	思う	どちらかと言えば思う	どちらかと言えば思わない	思わない	全く思わない	2.3%	18.5%	44.5%	21.9%	11.0%	2.3%	7.2%	23.4%	43.8%	16.2%	6.4%	3.0%	15.6%	23.3%	37.4%	13.2%	7.4%	3.1%
とても思う	思う	どちらかと言えば思う	どちらかと言えば思わない	思わない	全く思わない																								
2.3%	18.5%	44.5%	21.9%	11.0%	2.3%																								
7.2%	23.4%	43.8%	16.2%	6.4%	3.0%																								
15.6%	23.3%	37.4%	13.2%	7.4%	3.1%																								

【第3学年保護者アンケート】(上段平成29年2月 中段平成30年2月 下段平成31年11月実施)

とても思う	そう思う	どちらかと言 えばそう思う	どちらかと言え ばそう思わない	そう思わない	全くそうは 思わない
4.5%	21.1%	40.7%	23.6%	6.5%	3.5%
7.5%	16.3%	40.8%	26.5%	6.8%	2.0%
5.0%	17.8%	49.4%	18.3%	7.2%	2.2%

【第2学年生徒アンケート】(上段平成29年5月 中段平成30年2月 下段平成31年2月実施)

とても思う	そう思う	どちらかと言 えばそう思う	どちらかと言え ばそう思わない	そう思わない	全くそうは 思わない
3.7%	13.8%	36.4%	27.1%	14.1%	4.8%
9.7%	24.7%	42.5%	17.0%	4.6%	1.5%
13.0%	22.3%	41.6%	14.9%	5.2%	3.0%

【第1学年生徒アンケート】(上段平成30年6月 下段平成31年2月実施)

とても思う	そう思う	どちらかと言 えばそう思う	どちらかと言え ばそう思わない	そう思わない	全くそうは 思わない
3.9%	13.4%	44.5%	26.1%	8.1%	3.9%
9.6%	23.0%	40.8%	19.1%	4.3%	3.2%

B「日本と世界との歴史的つながりを踏まえ、日本の未来の在り方を志向し、グローバルな視点で歴史、伝統、文化、芸術、政治、経済、環境等について考えることができる。」

【第3学年生徒アンケート】(上段平成29年2月 中段平成30年2月 下段平成31年11月実施)

とても思う	そう思う	どちらかと言 えばそう思う	どちらかと言え ばそう思わない	そう思わない	全くそうは 思わない
1.5%	8.3%	35.8%	31.3%	17%	5.7%
3.0%	14.9%	36.2%	24.7%	14.5%	6.8%
10.1%	16.3%	33.1%	21.0%	8.9%	10.5%

【第3学年保護者アンケート】(上段平成29年2月 中段平成30年2月 下段平成31年11月実施)

とても思う	そう思う	どちらかと言 えばそう思う	どちらかと言え ばそう思わない	そう思わない	全くそうは 思わない
2.5%	9.5%	□9.7%	28.6%	16.6%	3.0%
3.5%	11.8%	38.2%	31.3%	11.8%	3.5%
4.8%	8.9%	45.8%	24.4%	10.1%	6.0%

【第2学年生徒アンケート】(上段平成29年5月 中段平成30年2月 下段平成31年2月実施)

とても思う	そう思う	どちらかと言 えばそう思う	どちらかと言え ばそう思わない	そう思わない	全くそうは 思わない
1.1%	7.9%	29.0%	30.1%	20.8%	11.1%
3.5%	12.0%	44.2%	27.1%	8.9%	4.3%
8.2%	14.9%	40.1%	25.3%	5.9%	5.6%

【第1学年生徒アンケート】(上段平成30年6月 下段平成31年2月実施)

とてもそう思う	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	全くそうは思わない
2.5%	9.2%	35.3%	34.6%	14.1%	4.2%
4.3%	11.7%	43.6%	28.0%	7.4%	5.0%

C「グローバルな社会課題に対する関心が高く、主体的に社会課題を探究しようとしている」

【第3学年生徒アンケート】(上段平成29年2月 中段平成30年2月 下段平成31年11月実施)

とてもそう思う	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	全くそうは思わない
1.5%	6.8%	28.4%	34.8%	19.0%	9.8%
2.6%	9.8%	30.2%	30.6%	16.2%	10.6%
8.9%	16.0%	26.8%	21.8%	11.7%	14.8%

【第3学年保護者アンケート】(上段平成29年2月 中段平成30年2月 下段平成31年11月実施)

とてもそう思う	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	全くそうは思わない
0.5%	7.5%	27.1%	39.2%	19.6%	6.0%
3.4%	8.9%	26.0%	45.2%	11.6%	4.8%
0.6%	8.3%	31.7%	41.7%	12.2%	5.6%

【第2学年生徒アンケート】(上段平成29年5月 中段平成30年2月実施 下段平成31年2月実施)

とてもそう思う	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	全くそうは思わない
1.4%	6.8%	26.2%	34.1%	20.4%	11.1%
1.2%	10.9%	37.9%	29.7%	14.1%	6.3%
5.2%	10.9%	32.2%	28.8%	14.2%	8.6%

【第1学年生徒アンケート】(上段平成30年6月 下段平成31年2月実施)

とてもそう思う	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない	全くそうは思わない
□.8%	11.7%	33.6%	31.1%	15.9%	4.9%
5.3%	15.7%	35.6%	27.4%	11.4%	4.6%

カ 分析

① 日本の歴史・伝統・文化に対する理解の深化

平成31年11月実施のアンケートA「日本の歴史・伝統・文化について語ることができる」について肯定的回答率が3学年生徒は76.3%であり平成30年2月と比較すると約1.9ポイントの微増であるが、「とてもそう思う」については8.4ポイント増えている。同保護者の肯定的評価は72.2%であった。第2学年生徒については、平成30年2月と平成31年2月では、「とてもそう思う」が3.3ポイント増えている。グローバルな課題を解決する上で日本の歴史・伝統・文化を関係付けることを前提としたので、理解が深化していると言える。課題研究の発表を見ると、来日する外国人に日

本特有の素材を使用した食の提供を図る研究をしている生徒は、日本の食文化について理解を深めるなど、課題研究により日本の歴史・伝統・文化の理解を深化させることができていることが確認できた。第1学年生徒は、73.4%の生徒が肯定的に回答している。1年生と2年生では、「理解」の捉え方が異なると考えられるが、6月の61.8%から11.6ポイント上昇している。

② 思考力・判断力・表現力・情報活用能力

平成31年2月実施のアンケートB「日本と世界との歴史的つながりを踏まえ、日本の未来の在り方を志向し、グローバルな視点で歴史、伝統、文化、芸術、政治、経済、環境等について考えることができる」について、第3学年生徒は、肯定的回答率が59.5%であり、平成30年2月と比較すると、5.4ポイント、平成29年2月と比較すると13.9ポイント増えている。同保護者の肯定的回答率は59.5%であった。第2学年生徒は63.2%が肯定的に回答している。課題研究の発表では、ほとんどのグループがフィールドワークを通して実施した量的調査や質的調査の結果等を用いてデータを分析し考察している。また、考察した結果等について図表等を用いて説明する等、思考力・判断力・表現力・情報活用能力は確実に向上していると捉えている。また、昨年度より「GL探究」の内容を改善したことで、第2学年生徒の肯定的回答率は、昨年度の2年生の2月と比較すると、9.1ポイント上回っている。

③ グローバルな社会課題に対する関心・意欲・探究心

アンケートC「グローバルな社会課題に対する関心が高く、主体的に社会課題を探究しようとしている」について肯定的回答率が第3学年生徒は51.7%であり昨年度の42.6%から9.1ポイント増えており、保護者の肯定的評価は40.6%である。グローバルな社会課題について関心・意欲・探究心は高まっていると捉えている。また、1学年生徒は、肯定的回答率が56.6%と3学年の中で最も高い。6月と比較すると、8.5ポイント上昇している。また、昨年度の1学年生徒と比較すると6.6ポイント上回っている。「GL探究」「GLアクティブ」等の改善の効果と生徒が探究学習の目的をよく理解した上で課題研究に取り組むことができているためであると考えられる。

④ コミュニケーション能力

課題研究に取り組む方法としてグループによる協働学習を取り入れたが、目的の一つはコミュニケーション能力を高めることにある。第3学年ルーブリック評価では、求めているレベル以上と評価した生徒が68%であり、生徒自身もコミュニケーション能力が身に付いていると捉えている。また、外部の人とコミュニケーションをとる機会があったが、社会人としての対応は概ねできたようである。多くのグループでは、グループ内で見解の相違等が生じても生徒同士で議論を重ね解決することができている。課題研究の評価の高いグループは、各自の役割が明確で探究活動が円滑に進められている。生徒の調整能力が高くコミュニケーションを適切にとることができる。なお、アンケートでは英語によるコミュニケーションについて回答を求めており、「英語で他国の人と身近な話題についてコミュニケーションができる。」については、全ての学年で肯定的回答率が55%を上回っている。

成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> ・課題解決に日本の歴史・伝統・文化を関係付けることを課していることにより主体的に、日本の歴史・伝統・文化の理解を深めている。1年生については、「GLアクティブ」を改善し、国立歴史民俗博物館、江戸東京博物館等を利用した講座の参加者が増加したことが効果的に作用したと捉えている。 ・思考力・判断力・表現力・情報活用能力については、「GL探究」の改善、生徒の課題研究への理解の深まり、教材の改善、授業時数の確保等によりそれぞれの能力が高まった。 ・大学及び企業・国際機関等との連携による講義等については、昨年度効果があった講座を残し、東京大学と連携した講座を新たに加えたことで、取り上げた課題に対する考察がより具体的になるなど、探究心の高まりが見られた。 ・千葉大学や日本政策金融公庫と連携し、課題研究に係る個別の相談をできるようにしたことで、研究が円滑に進んだ。 ・国内グローバル研修は、参加人数を増やすことで、英語でのコミュニケーションを積極的に行うことや表現力を高めようとする意欲が一層高まった。次年度以降も継続実施しつつ質の向上に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・行事等との関係から、1年次前期において探究の基礎について学ぶ機会等の時間が十分確保できていない。1年次については、総合的な探究の時間を1単位増やし、探究の基礎を学ぶ時間を確保して学校全体で取り組むことができるようにする。 ・「GLアクティブ」は、週時程外での実施のため、特別活動や部活動等となるべく重複しないように調整したが、連携先の関係から、複数の講座が同日に開催することになった。日程の調整が難しいことから、生徒の目的にあった講座が選択できるよう事前に講座について十分理解させる機会を設ける。 ・課題研究グループの中で、適正なコミュニケーションをとりつつ、生徒同士で調整することができるよう、生徒のコミュニケーション能力を向上させる指導が必要である。 ・グローバルな課題について、理系に係るテーマを取り上げたグループが増えているので、SSH事業の成果を活用し、科学的見地から課題解決に向けた取組ができるよう支援する必要がある。

(2) 仮説2について

<p data-bbox="236 1368 373 1397">ア 仮説2</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p data-bbox="272 1406 1337 1559">海外研修の機会を設け、現地の高校又は大学と連携を図り、自分の考えを発表したりディスカッションをしたりする機会や交流活動を設けるとともに、現地での調査活動、体験活動を通して日本との比較を行うことでグローバルな課題の解決策を探究させれば、異文化を理解し、より良き未来を指向することができるのではないかと。</p> </div>
<p data-bbox="236 1592 596 1621">イ 身に付けさせたい能力等</p> <p data-bbox="293 1630 1136 1659">日本と諸外国を比較検討し異文化を理解しより良き未来を指向する力</p>
<p data-bbox="236 1688 405 1718">ウ 実施内容</p> <p data-bbox="293 1727 703 1756">研究開発4 海外グローバル研修</p> <p data-bbox="272 1765 1353 1872">オーストラリア（7・8月）、シンガポール（9月）、オランダ（11月）、ドイツ（3月）・イギリス（3月）で課題研究に係る現地調査、現地校との交流及び課題研究に係るプレゼンテーション、ディスカッション等の実施</p>
<p data-bbox="236 1888 405 1917">エ 検証方法</p> <p data-bbox="293 1926 544 1955">生徒の報告書の分析</p>

オ 関係するアンケート (数値は人数, ドイツ・イギリスは平成30年3月実施)

D「今回の海外研修で、課題研究に関する新たな(異なる)視点・情報を得る機会があった。」

	おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
オーストラリア	11	5	4	0
シンガポール	4	6	1	0
オランダ	2	3	0	0
ドイツ	4	3	3	0
イギリス	10	4	1	0

E「あるトピックについて英語でプレゼンテーションすることができる。」

	おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
オーストラリア	3	16	1	0
シンガポール	9	2	0	0
オランダ	1	4	0	0
ドイツ	2	7	0	0
イギリス	2	7	6	0

F「あるトピックについて英語でディスカッションすることができる。」

	かなりできる	できる	少しできる	全くできない
オーストラリア	1	7	12	0
シンガポール	2	9	0	0
オランダ	1	2	2	0
ドイツ	1	8	1	0
イギリス	3	9	3	0

カ 分析

派遣した5か国において、フィールドワークに加えて現地校や大学生に向けてプレゼンテーションを実施するとともに、ディスカッションを行った。シンガポール研修では、食文化に関する研究をする生徒は、日本の魚料理(特に寿司)が販売されていることをフィールドワークにおいて知り、空き家問題をテーマにしている生徒は、高校生とのディスカッションにおいて、シンガポールでは空き家があまりなく問題視されていないことを知るなど、グローバルな視点で課題を捉える機会が得られた。オランダでの研修では、生徒は大学生とのディスカッションの中で食品ロスが多いことはオランダも同様で大学生がその問題を改善するための活動を行っていることを知り、グローバルな課題であることを改めて認識するとともに、課題解決の手掛かりを得た。アンケートDのとおり、肯定的回答者は61名中52名(85.2%)と高い。研究テーマとして取り上げていたことについて、それぞれの国の考え方・捉え方を知ることにより、新たな視点を得ることができている。また、5か国それぞれで現地校において課題研究についてプレゼンテーションを実施したが、アンケートEのとおり、53名(88.3%)が「かなりできる」「できる」と回答している。ディスカッションについては、アンケートFのとおり、43名(70.5%)が「かなりできる」「できる」と回答している。

成果	課題
<p>・生徒が英語でのプレゼンテーションに自信をもつことができ、海外においてプレゼンテーションを行うことで、英語による発信力を向上させることができた。</p> <p>・5か国それぞれの国で生徒の多くが課題研究を進める上で新たな視点を見つけ出すことができ、帰国後は自己の経験を他の生徒の伝えるとともに、課題研究を進める中心的存在となることができた。「日本と諸外国を比較検討し異文化を理解しより良き未来を指向する」ことに結びつけることができた。</p> <p>・昨年度の課題であった英語を使ったディスカッションについては、シンガポール研修事前研修等で基本的な姿勢を理解させ、留学生等と話し合う機会を設けたことで、シンガポール研修では概ね改善された。</p> <p>・シンガポール及びドイツについては、大学、同窓会との連携を図り、講師からは派遣国での経験を基にした指導・助言がなされたため、海外研修が円滑に行われた。</p>	<p>・イギリス研修については、事業開始当初、EU加盟国であることを前提に派遣計画を立てていたが、EU離脱を決めたため、目的を果たすことが難しくなった。今年度については、イギリス研修の内容を見直したが検証が必要である。</p> <p>・生徒に現地校で課題研究のプレゼンテーションを行うことを課しているが、課題研究が十分まとまっていない場合は、課題研究を進めることと並行して英語によるプレゼンテーションやディスカッションの事前指導を行うため生徒に負担がかかる。課題研究の進め方や現地でのプレゼンテーションの在り方について検討する必要がある。</p> <p>・生徒の英語を使ったディスカッション力を一層身に付けさせるため、海外（研修先）におけるディスカッションの在り方について理解させるとともに、留学生等とのディスカッション等を経験させる取組を継続する必要がある。</p>

(3) 仮説3について

ア 仮説3

「GLアクティブ」で得た情報を整理し、日本の歴史・伝統・文化を踏まえてグローバルな社会課題について研究(国際間での文化や社会の対立を排除し、その融和の実現を図る探究)を行い、国際社会に発信可能な英語での報告を行わせれば、英語力の向上、課題解決方法を考え創造的提案を行う発信力が高まり、課題を解決する能力と態度が身に付くのではないか。

イ 身に付けさせたい能力等

- ① 課題を解決する能力
- ② 創造的提案を行う発信力
- ③ 英語力

ウ 実施内容

- ① 研究開発1 課題研究
総合的な学習の時間を「GL探究」とし、1年次に「GLアクティブ」等で得た情報を整理し、グローバルな社会課題から研究課題を定めさせる。
- ② 課題研究以外の研究開発2 英語力、英語を用いてのコミュニケーション能力の育成
英語力向上対策講座や海外からの留学生との交流の機会を設ける。
- ③ 地域や同窓会との連携
「GL探究」（総合的な学習の時間）において講演等を実施する。

エ 検証方法					
① 生徒によるアンケート		③ 進路希望・進路意識の変容			
② 留学生等の外部からの評価		④ 英語検定等の達成レベル			
オ 関係する第2学年生徒アンケート (上段平成29年5月 中段平成30年2月 下段平成31年2月実施)					
G「日本人の立場で、国際的な文化や社会の対立を排除し、その融和を実現する方法を考えている。」					
とてもそう 思う	そう思う	どちらかと言 えばそう思う	どちらかと言え ばそう思わない	そう思わない	全くそうは思 わない
1.1%	5.7%	19.5%	31.6%	25.9%	16.3%
2.0%	8.2%	31.3%	32.4%	18.0%	8.2%
5.6%	11.9%	33.5%	26.0%	14.9%	8.2%
H「他国の人に対して、日本人として日本の歴史・伝統・文化を踏まえてグローバルな課題について解決策を提案できる。」					
とてもそう 思う	そう思う	どちらかと言 えばそう思う	どちらかと言え ばそう思わない	そう思わない	全くそうは思わ ない
1.1%	2.9%	15.9%	34.7%	28.5%	17.0%
1.6%	7.4%	32.2%	33.7%	17.8%	7.4%
5.2%	10.5%	28.5%	34.8%	12.4%	8.6%
I「英語で自分の発信したいことをプレゼンテーションする自信がある。」					
とてもそう 思う	そう思う	どちらかと言 えばそう思う	どちらかと言え ばそう思わない	そう思わない	全くそうは思 わない
0.7%	4.6%	7.7%	22.5%	33.7%	30.9%
2.0%	5.9%	19.1%	32.0%	25.8%	15.2%
5.2%	9.3%	26.4%	27.1%	16.0%	16.0%
カ 分析					
① 「課題を解決する能力」					
アンケートG「日本人の立場で、国際的な文化や社会の対立を排除し、その融和を実現する方法を考えている」について、平成31年2月では肯定的回答率が51.0%であり、平成30年2月と比較すると約9.5ポイント増えている。また、ルーブリックによる自己評価では58%の生徒が目標には概ね到達していると捉えている。課題研究において高校生にできる解決策を導き出し実現させた生徒は、自己の課題解決能力向上を把握できるが、検証を行うことが困難なテーマを扱った生徒は、身に付いた自己の力を把握することができていないケースがある。					
② 「創造的提案を行う発信力」					
アンケートH「他国の人に対して、日本人として日本の歴史・伝統・文化を踏まえてグローバルな課題について解決策を提案できる」について、平成31年2月の肯定的回					

答率は44.2%であった。まだ高い値ではないが、平成29年5月と比較すると、31.2ポイントの上昇であり、課題研究の成果である。1.2年の課題研究発表会においては留学生から「アイデアがよい」「興味深いテーマである」と評価されたグループが多かった。

③ 「英語力」

「GLコミュニケーション英語」において、オールイングリッシュでアクティビティを取り入れ、4技能統合型授業を行っている。また、課題研究発表会は、1年生については、英語のポスターを作成し全員が英語でプレゼンテーションを実施することができた。2年生については英語で発表するグループと日本語で発表するグループに分かれた。日本語で発表する場合は、最初に英語で研究概要を説明することとした。平成31年2月実施の生徒アンケートI「英語で自分の発信したいことをプレゼンテーションする自信がある」については肯定的回答率が40.9%であるが、平成29年2月実施時と比較すると27.9ポイント増えた。1.2年の課題研究発表会においては留学生から、「質問に対する応答に課題がある」「英語の発音の改善が必要」という指摘があった。

成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> ・第1学年の「GL探究」においてガイダンスの時間を増やすとともに、教材の改善や第2学年の課題研究進捗状況報告会を参観する機会を設けることで、課題解決に向けた研究の見通しを円滑に立てることができた。 ・第2学年生徒は、グローバルな課題を解決する上で、日本の伝統的な食材を広めるために、外国人向けの菓子を考案し、地域の店舗と連携して販売することで検証したり、外来種の問題の解決に向けてNPO法人と連携して活動することで検証したりするなど、社会と関わりをもちながら、高校生としての解決策を導き出し、提案することができた。 ・「GLコミュニケーション英語」のオールイングリッシュ授業の定着や英語によるポスター発表等により、英語を使用する機会を増やしたことで、英語によるコミュニケーションの自信を持った生徒が1年生の2月において61.7%となり6月から22.1ポイント増加した。 ・実用英語技能検定試験の受検者については、面接に対応した補習講座を行い、2級以上取得者が327名となり昨年より80名増加した。SGH対象生徒の英語力は着実に伸びている。 ・SGUへの進学を希望する第3学年生徒は、平成29年7月から10.3ポイント上昇し76.2%となった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中間評価で指摘された「特定の教科以外の教科についてもプログラムに位置付ける」ことが課題である。校務分掌に探究学習部を新設し、全教科の職員が所属し、全教科で課題研究に取り組める体制を再構築することで改善する。 ・第1学年については、後期からグループによる研究を始めるとともに、2月の英語による発表の準備を行なうが、十分な時間を確保することが難しい。次年度は、「GL探究」を1単位から2単位に増やすので、円滑に進むよう計画する必要がある。 ・課題研究を進める上で身に付けた力を確認する上で、ルーブリック評価を開発してきたが、生徒自身が学習目標をしっかりと捉えるとともに、課題研究を通して身に付けた能力を生徒自身が確認でき、主体的に学習に取り組めるよう客観的でわかりやすい評価に改善する必要がある。 ・英語の教員が実用英語技能検定試験の補習講座及び海外研修事前指導における英語の指導を行なっているが、補習講座の参加者が増加しているとともに、補習講座と事前指導の実施時期が重なることが多く、英語科の教員の負担が大きい。事前指導の内容を検討するとともに、外部人材を活用することが必要である。

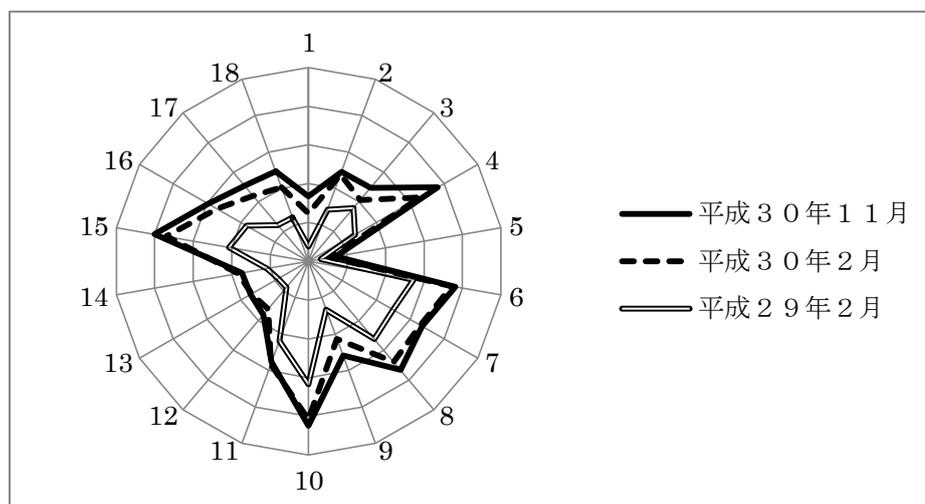
2 生徒の意識の変容等

平成30年2月（1年生は6月）と平成31年2月（3年生は11月）に同じ質問項目で普通科生徒及び普通科生徒の保護者対象にアンケート調査を行った。研究開発の質問項目は、次のとおりである。

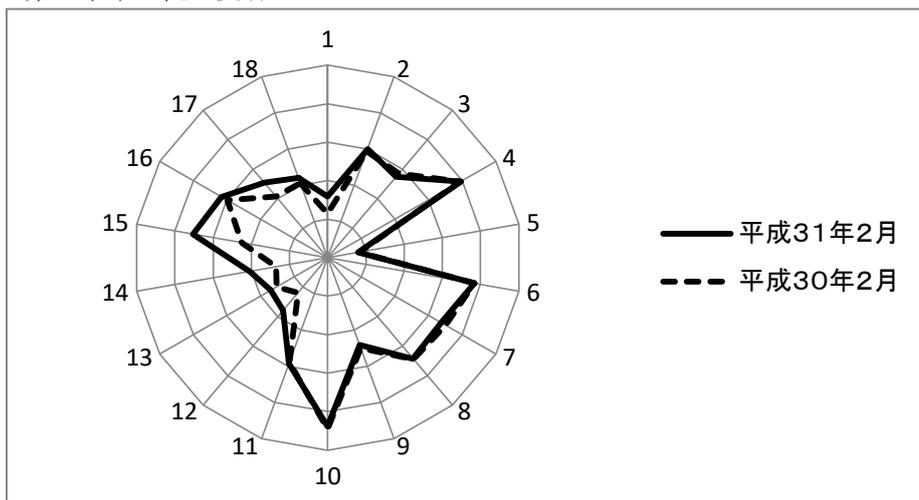
- 1 主体的に社会貢献活動に取り組んでいる。
- 2 課題を自ら見付け主体的に課題について研究を深めている。
- 3 将来海外留学をしたり，仕事で国際的に活躍したりしたいと考えている。
- 4 国際化に重点を置いている大学に進学したい。
- 5 海外の大学に進学したい。
- 6 日本の歴史・伝統・文化について語ることができる。
- 7 日本と世界の歴史・伝統・文化とを比較研究することができる。
- 8 博物館等の研究機関を利用して研究することができる。
- 9 グローバルな社会課題に対する関心が高く，主体的に社会課題を探究しようとしている。
- 10 異文化を理解し柔軟に受け入れることができる。
- 11 英語で他国の人と身近な話題についてコミュニケーションができる。
- 12 英語で他国の人と社会的な話題についてディスカッションができる。
- 13 外国に行き，英語で現地の人とコミュニケーションを取りながら，共同で調査をしたり交流をしたりすることができる。
- 14 英語で自分の発信したいことをプレゼンテーションする自信がある。
- 15 プレゼンテーションソフトを使った発表ができる。
- 16 日本と世界との歴史的つながりを踏まえ，日本の未来の在り方を志向し，グローバルな視点で歴史，伝統，文化，芸術，政治，経済，環境等について考えることができる。
- 17 日本人の立場で，国際的な文化や社会の対立を排除し，その融和を実現する方法を考えている。
- 18 他国の人に対して，日本人として日本の歴史・伝統・文化を踏まえてグローバルな課題について解決策を提案できる。

(1) 生徒の意識の変容

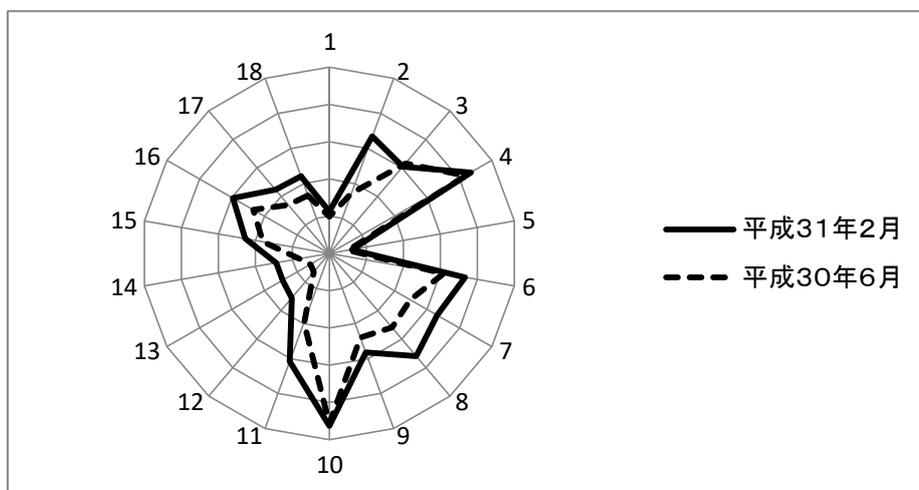
① 第3学年生徒の変容



② 第2学年生徒の変容



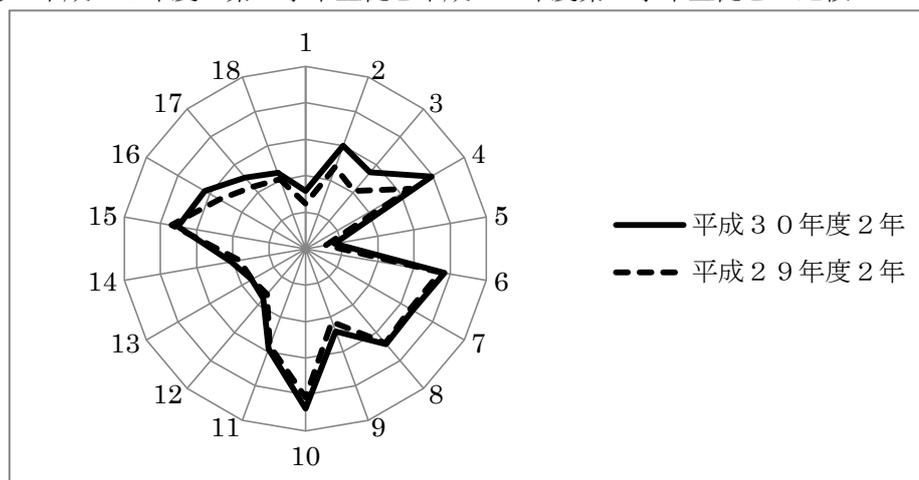
③ 第1学年生徒の変容



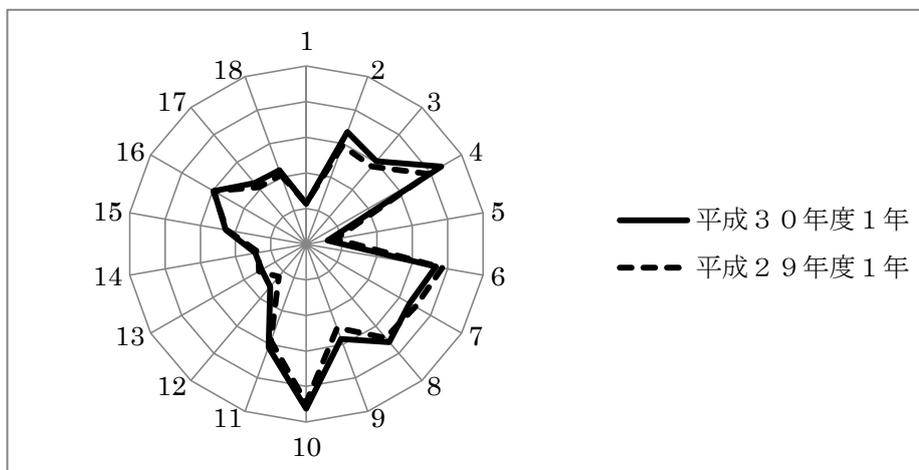
グラフからも分かるように、どの学年においてもSGHに係る取組を行うことにより、ほとんどの項目について肯定的回答率が上昇しており、意識が高まっていることがわかる。どの学年にも共通している傾向は、1, 5, 12, 13, 14, 18がなかなか高まらない。質問項目1が高まらないのは、学習、課題研究、部活動や特別活動等により時間的余裕がないためと考えられる。また、質問項目5が高まらないのは、質問項目4「国際化に重点を置いている大学に進学したい」という意識が高いことから、生徒はSGU等の国内の大学で自己実現が可能と判断しているためと考えられる。英語に関する項目12, 13, 14については、まだ、自信に結びついていないことが分かる。英語力については、身近な話題についてのコミュニケーションには自信を持っている生徒が多い（質問項目11）が、他国の人とのディスカッションや共同調査、英語でのプレゼンテーションについては経験が少ないので自信に結びつきにくい。来日した海外の高校生や留学生との交流機会を増やすなどの工夫が必要である。

(2) 前年度との比較

① 平成30年度の第2学年生徒と平成29年度第2学年生徒との比較



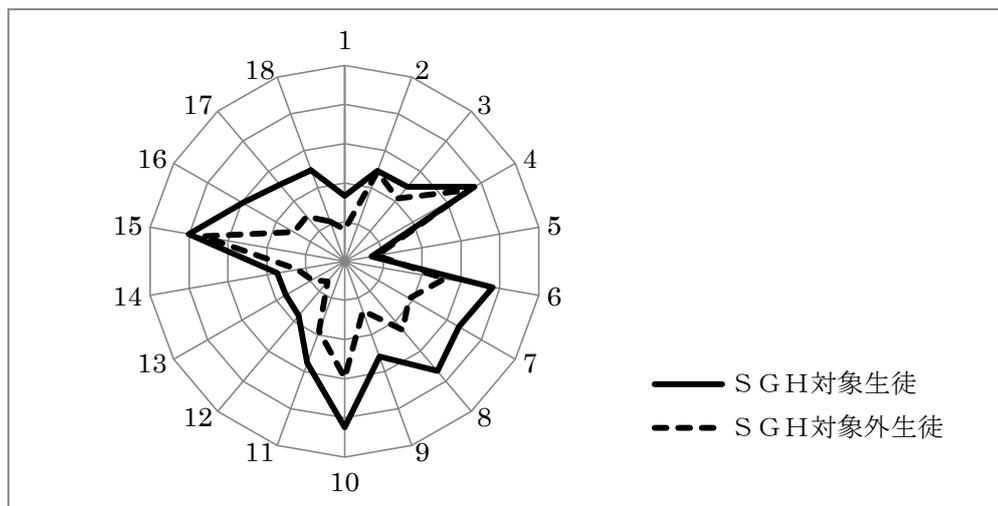
② 平成30年度の第1学年生徒と平成29年度第1学年生徒との比較



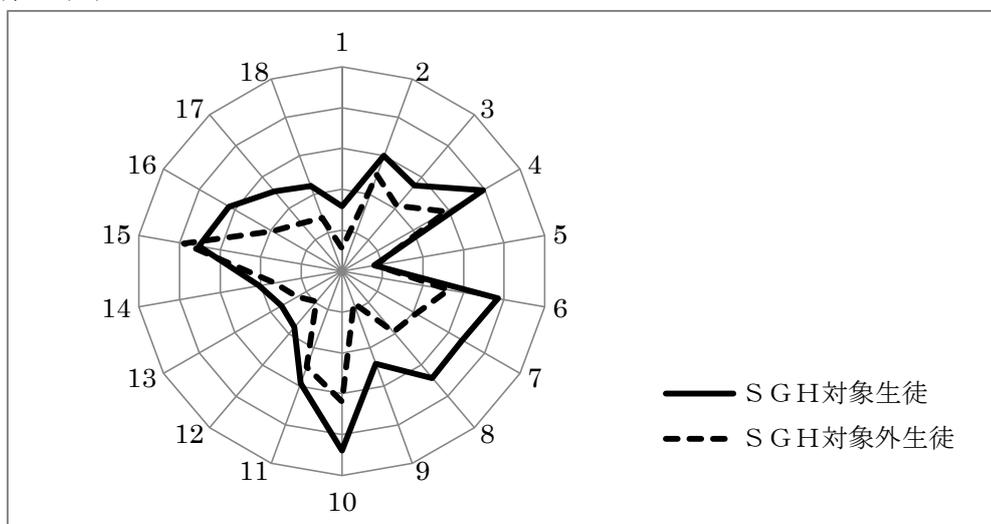
第2学年生徒については、昨年度の第2学年生徒よりも意識が高まっている。特に質問項目2, 3, 4, 16は意識の高まりが非常に大きい。また、第1学年についても昨年度の第1学年生徒よりも意識の高まりが見られる。これは、昨年度の課題を改善して実施した「GL探究」「GLアクティブ」が生徒の変容に影響していると考えられる。SGH事業に係る取組が機能していることの表れである。

(3) SGH対象外の生徒との比較

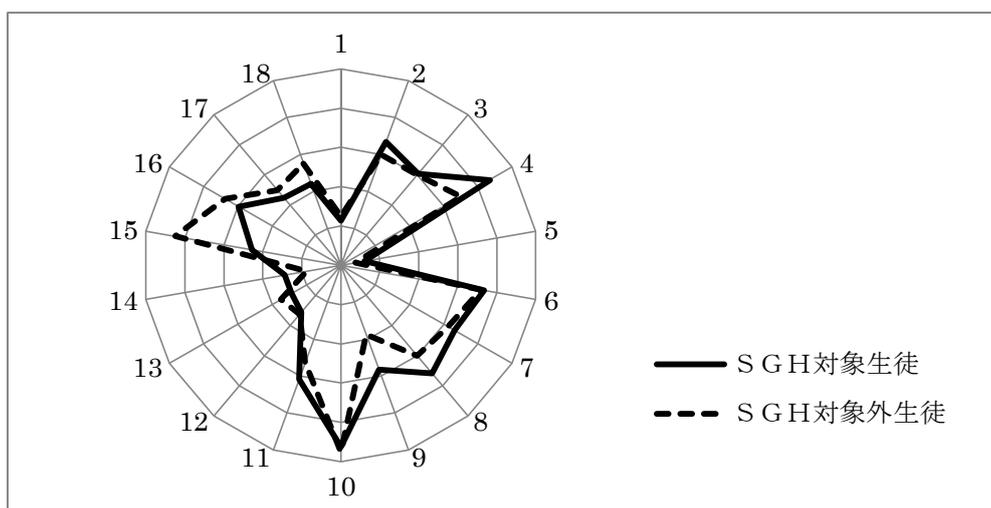
第3学年



第2学年



第1学年



第2・3学年については、質問項目のほとんどがSGH対象生徒の方が上回っている。7～9は日本の歴史・伝統・文化に係ることやグローバルな課題に係ること、11～14は英語力にかかること、16～18はグローバルな課題についての思考力・判断力・表現力や解決能力や提案力に係る項目である。本校において身に付けさせたい能力に当たる部分であり、SGHに係る取組が確実に成果となって表れている。

第1学年については、13、15、16、17、18について対象外の生徒が上回っているが、それ以外の項目は概ね対象生徒の方が上回っている。第2学年、第3学年の傾向から、第1学年生徒については、これからの「GL探究」での課題研究や発表経験、学校設定教科グローバル・ラーニングでの学習の深まりにより、意識は高まると考えられる。

これらのことから、本校のSGHに係る取組で身に付けさせたい力が高まっていると意識している生徒は確実に増えており、成果が出ていると言える。また、英語力についてはGLコミュニケーション英語で英語運用能力の向上を図るとともに、積極的に海外の人と英語でコミュニケーションをとる機会を設ける必要がある。

3 外部の課題研究発表会等の参加状況

- (1) 世界高校生水会議「Water is Life 2018」(渋谷教育学園)
プレゼンテーション 英語 1チーム (Stewardship&Polisy 部門で第3位)
- (2) SGH全国高校生フォーラム
ポスター発表 英語 1チーム
- (3) 第3回関東・甲信越静地区 スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会 (立教大学)
プレゼンテーション 英語 2チーム, 日本語1チーム
ポスター発表 英語 1チーム
- (4) 第3回国際研究発表会 (千葉大学)
ポスター発表 英語 1チーム
- (5) 第10回千葉県課題研究発表会 (千葉サイエンススクールネット)
ポスター発表 日本語2チーム
- (6) SGH甲子園2019 (関西学院大学)
ポスター発表 英語 1チーム